人間の〝いのち〟自然の尊厳

大日本塗料株式会社社長　池　田　悦　治

人類の文化は，人間の労作が自然に調和した歴史である．われわれ人類は，屢々自然の猛威によって，その生命をさえ失っている．われわれは，これを天災と呼び，時として自然に挑戦して，この天災を征服しようと試みた．そして或いは成功し，或いは失敗を重ねながら，今日尚，自然制禦の鍵を見出そうと懸命である．自然に対立した人類の構えといってよかろう．

しかしながら，元々人類は，それ自体大自然の仕組みの中の一存在に過ぎないのだから，人類が自然に対立して存在し得ると考えることが無理だ．

人類は，極めて当然に，自然との調和に生きて来た．現在われわれが誇る〝文化〟は，この調和によって築かれたのである．人類がもつ英知は，それ程賢明に，自然利用の限界を知っていたとは言えないだろう．けれども，われわれの先輩達が，つくり上げた前代の文化は，自然と対応調和してつくられている．少くとも先人達は，自身が生きるために必要な自然環境を破かいしてはいない．

それだのに，近代科学によって打ち立てられた巨大な自然利用の技術に魅せられた近代人は，自らの生存条件を忘れてしまって，自然を食い潰しつつある．自然の摂理を越えて，川を濁し，山を削り，空を汚してしまった．

人類が，長い年月をかけて幸福をつくり出そうとした労作は，逆に人類滅亡への自然破かい活動に通じている．

人類は，ここに至って漸く〝人類にとって真の幸福は何か〟を反省し始めた．所謂公害の問題が提起された理由である．

抑々人類の幸福は，物と心の両者が充足均衡するときに完成される．偉大な哲学や宗教，そして文学や芸術が，どんなに盛んであろうとも，直接的に自然を破かいすることはない．むしろこれ等人文科学の担い手達は，声を大にして，思想や芸術発祥の温床〝自然〟の尊さを説いている．

余りに多くの人々が，物的な生活にけんらんを求めた結果，これら聖なる叫びが取り上げられなかった．社会科学に対する自然科学の偏重に帰因するのである．

私は，化学工業人として，日々化学製品の生産に従事している．どの研究室からも，どの工場からも，相当量の公害物質を排出するのだが，これ等はすべて企業の全責任において，完全に処理されている．製品を創造することが出来る能力は，そのまま公害を防止することが出来る能力となるという確信と，人間の労作は，人類社会を幸福にするときに有意義であり，社会から許されるのだというヒューマニズム経営理念により，公害排除を徹底したのである．

思えば，凡そ20年前の私のこの発想は，極めて普通に，何の圧力にもよらず，日常の企業生活の中に起きていた．私の企業モラルが，今日の公害を防ぎ得たのである．

公害から自然を守るという二元対立意識の以前に，自然との調和に働く技術の志向を検討すべきである．ここにモラルの昂揚が要る．

たった一度しか生れて来ない人間の，その生命を至尊してこそ，一切の文化が意義をもつ．生命を否定するようなどんな技術も許されないのである．

人類が育つ温床〝自然〟を，利用済みになった自然だと錯覚するところに，自然破かいの暴挙が始まる．人類は〝おごれる〟余り，自ら墓場への道をつくりはじめたのである．

学者もいうように，〝生物は，植物も動物も一様に，その繁栄の絶頂において，自己死滅の

条件をつくる〟.

われわれは，近代において，科学技術の巨大な能力を創出した．そして人類の英知としてこれを誇っている．

月面に印した足跡が，この地球にどんな足跡として映るだろう．人類と，天体との関係探究は，もっと身近かな，〝自然地球と文化人類との調和〟を究めることに重点されなければならない．

人類は，お互いの人生が，より本質的に自然によって育くまれる〝いのち〟であることを見直さねばならぬ．いのちの育つ条件，それはたった一つ，自然の他にはない．

人間が人間を尊厳するのはいい．しかし，それはあくまでも，人間が人間に対する関係においてだけであって，人間が自然に対して尊厳されているのではない．

いのちの原点として〝自然を尊厳する〟ことを忘れてはならぬ．

近代人の英知が，改めて自然の価値を見直したとき，人類は，再び永遠の繁栄をつづけるであろう．

今日も，明日も，自然は無心に，人類の英知のままに在る．人間の〝いのち〟として．

1972, 4. 10,

来る6月5日，ストックホルムで開催される〝国連人間環境会議〟には，世界各国から2000人の関係権威が出席されるという．

私は，産業人の立場から，今日の所謂〝公害〟に取り組んで既に久しい．

時を得て屢々，公害防除の必要性とその可能性を説いて来た．昨年もスウェーデンの環境保護庁を訪れ，私共が実践している公害防止技術を紹介したのである．

こんな次第から，今回の国連人間環境会議に，他の人達と共に提言したのがこの小文である．